

第7回 神奈川県ボランティア活動推進基金審査会

平成30年1月31日（水）14:00～17:50

（開会）

（基金事業課長から開会の説明）

- ・石渡委員、中島委員欠、委員6名で開催。
- ・本日の流れを説明
15時00分から、平成30年度ボランティア活動補助金事業（継続）のプレゼン審査。
16時30分から、プレゼン審査に対する選考を行う。（結果発表は2月15日に行う第8回審査会で行う）
その後、事務局から平成30年度基金21審査会年間予定等について報告。

（審査会長から開会の宣言）

- ・平成29年度第7回神奈川県ボランティア活動推進基金審査会を開催。
- ・率直な意見交換を通じて、公平な審査をする必要があり、神奈川県情報公開条例第25条第1項第2号を適用し非公開とする。
ただし、プレゼンテーション審査は公開する。

（審議事項 平成30年度ボランティア活動補助金事業（継続）の選考）

（基金事業課長から以下について説明）

- ・ボランティア活動補助金事業の応募状況説明
- ・来年度のボランティア活動補助金事業に係る予算について説明
- ・審査委員と利害関係のある団体からの提案なし

（事務局からプレゼン審査対象団体の申請概要および幹事会での事前調査結果について報告（資料4））

（委員による審議）

- ・ボランティア活動補助金事業への申請事業に対するプレゼンテーション審査における確認事項等について検討した。

（プレゼンテーション審査の実施）

- ・ボランティア活動補助金事業への申請事業に対するプレゼンテーション審査を次のとおり行った。

【高校図書館内居場所カフェ事業】

特定非営利活動法人パノラマ（以下「パノラマ」という。）

[質疑]

（田中委員）

教育行政予算に取り込まれての運営を避けるの真意をお聞かせ願いたい。

（パノラマ）

現在、大阪府の教育委員会予算でカフェが15校で運営されている。委託事業であるが、委託事業だと成果が課せられることと、成果が出なかった時に、学校から排除の理由にされるリスクが非常に強いと感じている。また、カフェのことを面白くないと思っている人から、足元をすくわれるリスクが高い。私達が行っているのは委託事業ではなく、助成事業で行ってきている。委託事業で行う際は、成果指標委員会で行っている、私達が考える仕様書をベースにいただけるものであればお受けしたいと思うが、今簡単に委託を受けることはリスクと感じている。

（田中委員）

しかし、将来的には委託にも対応できるように、仕様書作りのところから意見を言える体制を作っているという理解でよろしいか。

（パノラマ）

はい、そのとおりです。

（田中委員）

大和東高校ではカフェと個別相談を同日開催とし、個別相談をカフェの前に行うとの事だった。授業は6時限目までであると思うが、その後の3時間ほどでカフェを行うという理解でよろしいか。

（パノラマ）

カフェは3時半から5時の間で行っている。6時限目終了後の放課後の時間を使っている。個別相談事業はその前の時間を使って行いたいと考えている。田奈高校ではこの形で行っていて、相談に来る事が公欠扱いとなっていて、欠席の扱いとはならない。

（田中委員）

昨年実施したアンケートでは 3 校を対象にしているが、実際の事業実施は 2 校となっている。色々なタイプの学校に広げるとするのは難しいという判断か。

(パノラマ)

アンケートは県内で 3 校、大阪府で 2 校を対象としている。初年度に関してはどこまで集計業務ができるかわからなかったため、おさえて 3 校という事にした。今後最大 10 校まで増やすことを考えている。

(田中委員)

カフェの実施を 10 校まで増やすという事か。

(パノラマ)

アンケートの実施対象についてである。カフェは現在の 2 校から、私たち自身で増やす予定はなく、ノウハウを提供することでカフェが広がることにミッションをおいている。実際、県内で 9 校までカフェが広がっている。

(田中委員)

ボランティアの養成について、初年度は課題が生じ、現在は効果の高いフォローをされたという事だったが、具体的にどのような工夫を行ったのか。

(パノラマ)

居場所とは何かを知ってもらう場所であるが、ワークショップ形式で、例えば生徒と SNS の交換をしないで下さいと言うだけではなく、なぜダメなのかという事を考えてもらうこととしている。あるいは、生徒に踏み込んだ助言はしないで下さい、では、何故でしょうか、という事をグループでディスカッションしてもらう。その前に、居場所とは何か、ということが入っていると、結構いい答えが出てくる。それが刷り込まれていって、養成講座としてのクオリティが上がっていると思う。現在、ボランティア講座は 5 回開催し、34 名の方々に参加していただいた。

(田中委員)

予定していた人数に概ね合致しているということか。

(パノラマ)

もう少し増やしたいので、大和市の社会福祉協議会、青葉区の社会福祉協議会の協力を頂き、より地域に密着した広報ができるよう連携に係る打合せを行っ

ている。

(田中委員)

事業の全体像を見ると、職業体験バイターンを挙げておられている。補助金対象ではないと思うが、これについての予算が読み取れなかった。企業に対する働きかけや、働くことに関わる支援でコストもかかると思うが、どのように行うのか。

(パノラマ)

内閣府のこども未来応援基金から年間 450 万円ほどの助成を受け、企業開拓およびマッチングを行っている。来年度は田奈高校、大和東高校だけではなく、その周辺の学校も巻き込んだ形で行っており、開拓した企業が無駄にならないように、休眠企業とならない形で、スケールアップするための予算獲得が出来ている。

(田中委員)

申請書の中には学校の閉鎖性にも言及されていたが、突破していくためにどのようなことをされたか。

(パノラマ)

私達ユースワーカーからすれば困難事例の解決しかないと思う。学校に来なかった子が来るようになる。辞めると言っていた子が来るようになることの積み重ねで信頼関係が構築されていく。私は田奈高校で 7 年間相談員を務めていて、現在、学校評議委員を務めている。その中の学校評価委員会の会長に選ばれており、信頼していただいて機能できているのではないかと考えている。

(田中委員)

効果測定のための指標は、将来的に仕様書に反映させるために非常に重要だと思うが、効果を測定していくときに、進路未決定者が減ったとか、相談者数が増えたとか、量的には色々な指標があると思うが、質的な指標というのはどのように考えているか。

(パノラマ)

カフェの中だけではなく、カフェに来た生徒達が、学校内での動きがどのように変わっていくかが一番大きなところだと考えている。先生達との会話が増えたり、学年行事への参加が増えるなど、間接的な事が重要なのかなと考えてい

る。

お菓子と飲み物があれば子ども達は満足するが、満足の次にあるもので測っていきたい。

(長坂会長)

来年度の申請は昨年度の計画時点から 100 万円増えているが、どのように整理したらよいか。また、図書館カフェという形で始まった事業であるが、大和東高校では図書館ではないことについてどのように考えているか。

(パノラマ)

大和東高校の図書館ではカフェを行うスペースが物理的に確保できなかった。私達は図書館で行うことは、一つの手段であると考えている。図書館で行うことを目的とは考えていないため、今後もラウンジスペースや様々なスペースでの可能性を追求していきたいと思っている。ただ、図書館で行うことの意味はとても強く感じている。

(長坂会長)

予算上の問題として、スタッフを 1 名雇用されたが、これから継続性との関係でどのように感じているか。

(パノラマ)

安心し、大変満足している。

(長坂会長)

神奈川モデルへの提示という事で、報告書を予定されているが、事業が多忙な中で、3年間のまとめの成果報告書の作成は可能か。

(パノラマ)

アンケートの結果の中から、どのようなエビデンスに耐えうるデータが出てくるか、何ともいえないところではあるが、神奈川ネットワーク運動から予算を獲得していて、成果指標委員会の委員で全国 5 ヶ所でフォーラムを開く予定がある。そういったもので、この事業の神奈川モデルが全国に波及していくことができるのではないかと考えている。

【「地域を広報する」研修・ネットワーク事業】

特定非営利活動法人森ノオト（以下「森ノオト」という。）

[質疑]

(大川委員)

今年度の事業 1、事業 2 の参加者はどのように集められたのか。

(森ノオト)

森ノオトのウェブメディアやチラシを作成し、県内の全ての市民活動センターに配布し、配架の依頼を行った。横浜市内では区の支援センター、社会起業家の支援事業をしている方などに、何故私達がこのような事業を行うのかを直接説明し、配架の協力をお願いした。一方事業 2 のローカルメディアミーティングについては、元々 SNS を使っている層が多いと想定して、講座のレポートを行い、SNS で発信することと、フェイスブックでイベントを立ち上げて参加申し込みを受け付ける、これまでの参加者を顧客管理システムに入れ、関心のある層にメールマーケティングを行うなどして、参加者を集めた。

(大川委員)

2 つの事業を終えたとして、それぞれの成果についてどのように考えているか。

(森ノオト)

事業 1 に関しては、実践できる内容を大事にした。各団体の参加者にチラシを持ち寄ってもらい、壁に張り出し、受講生同士で評価するワークショップを行い、文字が多すぎる、伝わらない等の意見を受けて、講師であるデザイナーが作成の事例を公表したり、プレスリリースのフォーマットを渡し、実際に書いてもらったりした。また、文章講座ではブログで伝わる文章を、起承転結がわかるようフォーマットに書き、実際に団体のブログで発信していただく等、伴走型で宿題も設けながら支援を行った。

(大川委員)

成果というのは、実際に研修を受講してどのように行動が変わったか、広報の発信の仕方が変わったかということだと思うが、それについてお尋ねしたい。

(森ノオト)

事業 1 については個別相談を行い、団体によって成果目標を設定し、会員増であるとか、ブログのアクセス増、集客増等について 2 月頃ヒアリングを行う。講座終了が 9 月末のため、実践し、ヒアリングのためのシートを作成し共有している。事業 2 については、これまで 143 名の参加者がいて、議論を行っているところだが、来年度の事業でローカルメディアの行動指針を、ロゴやアイコンな

どわかりやすいものを策定して、県内でローカルメディアの発信を行っている皆様に使っていただくところまで持っていきたい。

(大川委員)

初年度の事業は、受講団体の広報の仕方を高めるような内容であるが、2年目の内容は森ノオトの仕事の一部を担うような印象を持った。1年目と2年目とで内容を変えた意図を伺いたい。

(森ノオト)

受講生の皆さんがメディアで発信してもらいたいと思ったとき、森ノオトが発信窓口になれるのではなく、受講生の方々に私達のメディアを提供することが、発信のサポートをするために役立つと思った。受講者の皆様自身が事業を担っていただくという感覚については、私達がかかり細かく校正を入れたり、事実関係を検証したりしながら実際に書いていただく中で編集側が発信力の育成されるという部分がかかり大きい。受講生が発信することで、社会課題を理解したり、データを集めることを実地で学んでいただく場として提供するには、資料や社会背景のデータなどについてアドバイスをを行い、具体的に支援を行うことが出来ると考えている。

(大川委員)

補助金事業終了後、どのように発展、展開させていくか構想をお聞かせ願いたい。

(森ノオト)

事業1について、前年度、ローカルメディアについて23回の講演を行った。県内の市民活動支援センターや都内の市民活動支援センターから講座の委託を受けるなど展開している。事業2は単体での事業化は難しいと考えている。行動指針を策定するプロセスや、ローカルメディアのあり方が日進月歩で変わってきている状況で、メディア自身も迷っていて羅針盤を求めているため、羅針盤を作っていくプロセスこそ、県内外の市民団体の情報発信のあり方を伝える上で、支援事業という形でコンパスを作成することで、事業性を見出せるのではないかと考えている。

(小松委員)

皆さんが現在行っている事業は、中間支援という形で理解してよろしいか。

(森ノオト)

はい。

(小松委員)

中間支援や協働事業で一番に行政に期待することを聞くと、広報という回答が非常に多い。類似する団体があるかもしれないが、貴団体の優位性とは何か。

(森ノオト)

私たち自身がB to B、B to C両方の事業を持っていて、特にB to C向けの事業では行政に対する提案をいくつもやっている。行政の方も市民に向け、情報発信をどの様に行ったらよいか迷っていて、それを常にアップデートしながら、リアルにつかんでいるところだと思う。横浜市青葉区の事業を多く請けているが、例えば往復はがきでの集客をやめる案であるとか、子育て層をターゲットにする際の発信方法などを実際に提案して、その結果を受講生にリアルに伝えることができる。

(小松委員)

地域には課題が山積しているが、課題ごとに提案をしていくということか。それとも、トータルで地域のあり方を提案していくということか。

(森ノオト)

私達は最終的に、エコロジーにつながるか、という視点で常に考えている。持続可能な社会を作ることがどうかという形で、課題が寄せられた時点で、私達がそれをやるべきかどうか考えている。ただ、情報メディアがあるという事によって、エコロジーという編集方針で行っているが、エコロジーをエコロジーの世界だけでやっても、多様なステークホルダーには結びつかない。一つの問題をしっかりと分析し、課題を収集して、それを発信していくことによって、多様な問題とつながり、解決していく力になるという意味で、情報を基軸にした中間支援というのは、大きな可能性を持っていると考えている。

(小松委員)

色々な問題が顕在化している中で、貴団体の活動は磁石みたいなものだと考えればよいか。

(森ノオト)

はい。色々なものを複層的に積み上げる。特にウェブメディアの場合は情報が

重なれば重なるほど、ストックやアーカイブとして多様な分類として、タグを付けて引き出すことができる。

(長坂会長)

来年度の申請書の中に、SDGs が出てくるが、申請の中で SDGs は、どの様な位置づけで使おうとしているか。

(森ノオト)

事業 1 の参加申し込みの動機の中で、あなたの活動は SDGs のこの分野に当てはまるとしたらどれですか。という投げかけをし、参加者に SDGs を通じて自分の活動を定義していただきたいと考えている。

(長坂会長)

ありがとうございました。

【子どもがつくる地域メディア「じもたん kids」】

じもたん kids

[質疑]

(高橋委員)

とても素晴らしい活動だと発表を聞いて思った。
HP の制作に関して、申請書には言及がなかったので確認したいが、さらなる PR のために HP を作るという説明があったが、これは、じもたん kids 専用の HP か。

(じもたん kids)

はい。

(高橋委員)

申請書の中で、波及性について言及されているが、今年度 2 つの団体から活動に関して、つながるきっかけがあり、素晴らしいことだと感じたが、どの様なきっかけで 2 つの団体とつながったのか。

(じもたん kids)

フェイスブックで他の地域でも展開したいとコメントしたところ、2 団体から話を聞きたいとの連絡があり、実際に話しをした。

(高橋委員)

今後も広がったらよいと思う。

3つ目は、補助金終了後の展望のところで、他の事業展開でも収入を確保したいと協賛広告、作文教室があげられているが、去年は仕事の仲介の場、じもたん kids の活動が連動した教育関連事業などと変化されているようだが、これからの流れや、展開について教えていただきたい。

(じもたん kids)

仲介について当時考えたが、今の段階では難しいようなので、現在は考えておらず、もう一つの教育事業のところで子どもの作文教室を考えた。じもたん kids は記事を書くので関連性があると思い、1月からスタートした。

(高橋委員)

作文教室が関連する教育事業から発展し、様々な子どもに参加いただいて、自主財源に繋げるというイメージでよろしいか。

(じもたん kids)

はい。

(高橋委員)

終了後の展望欄で、新聞の方向性を見直しをしていかなければならないと感じておられていて、子どもの発表の場以外にも、もう少し地域の人達を読みたいと思う内容も踏まえなければいけないとの記載であったが、そのあたりの考え方を聞きたい。また、付随して事前に質問をさせていただいた、地域で一番読まれるメディアに成長するために、大人に読まれることと、子どもの記事との異なった要素について、どの様に折り合いをつけるかという質問に対し、折り合いは意識していないという回答だったが、新聞の方向性を見直しに対し、折り合いをつけなくても大丈夫だという根拠をお聞かせ願いたい。

(じもたん kids)

今までの新聞は子どもの作文を並べていて、関係者からは好評だが、興味のない人は関心を持ってくれない。実際に読むのはお母さん方が多いため、お母さん方が楽しめる材料が欲しかった。デザインを変えて見やすくしたこともあるが、広告について、じもたん kids がつながりのあるところと、応援しあえる広告をイメージしている。子どもの取材を受けてくれる時点で、子どもに視点が向いている感じがするし、共感してくれる店や人の応援になるような広告にしたいと考えている。例えば、ピアノの先生の広告特集を作ってみたが、これまで、お母

さん方のクチコミを基にピアノの先生を 5 人に取材した。ピアノの先生というのは HP 等は持っておらず、子どもの稽古事を探す際、クチコミ等の情報しか集められなかった。大人が興味を持つ、子どもの稽古事やイベントなどの形を意識している。

(高橋委員)

折り合いをつける必要がないというよりは、応援や共感というテーマが入っているという理解でよろしいか。

(じもたん kids)

はい。

(小松委員)

子ども達が取材をして、記事を書き、新聞になったのを見たとき、子ども達の表情は変わるか。

(じもたん kids)

子どもによっても異なるが、低学年の子はすごく喜ぶ。

(小松委員)

申請書の中に、取材時間が 1 件あたり 30 分くらいと、短い印象があるが、いかがか。

(じもたん kids)

大体であるが、もっと長い場合もあるし、短い場合もある。取材相手にもよる。

(小松委員)

大人が予め準備をすることなどはあるか。

(じもたん kids)

子ども達が予め質問を考え、取材を行っている。

(小松委員)

全体で 2 時間から 2 時間半との記載があるが、これは一人の子どもが取材を行って記事を書き上げるまでの時間か。

(じもたん kids)

取材に行って記事を書いて、解散するまでの時間が 2 時間から 2 時間半である。

記事を書けない子には、印象に残ったことを絵で書いてもらったりしている。

(小松委員)

記事を書けない子どもに絵を書いてもらうというやり方は、皆さんが考えられたのか。

(じもたん kids)

低学年の子など、稀なケースであるが、どうしても記事を書けない子どもに、それなら絵を書いてみよう、というところから始まった。大体の子は原稿用紙半分から 1 枚くらい書いてくれる。

(小松委員)

子どもは卒業などで入れ替わっていくこともあると思うが、長い継続した事業にしていきたい。ありがとうございました。

【女性と防災のオリジナル寸劇とワークショップの普及】

特定非営利活動法人かながわ女性会議（以下「かながわ女性会議」という。）

[質疑]

(柴田委員)

女性の視点が重要なのは理解したが、外国人や学生を対象としたことを加えた理由を説明願いたい。

(かながわ女性会議)

外国人の問題であるが、東日本大震災以来、外国人が避難訓練に参加する地域が増えてきた。非常時の情報が入って来ず、長々とした情報も理解することが難しいとの要望が外国人の方々から出ている。外国人向けに寸劇を翻訳して演じてもらえるよう、協力団体に呼びかけを行っている。

学生については、地域の事に関心のない学生が増えており、防災のことをわかってほしい。寸劇で、若い人の反応は非常によく、特に男子学生は女性の気持ちがわかったとのことであった。また、隣近所と知り合っておく必要性に気がついたようだ。神奈川大学の周辺は高齢者が多く、何かあったときに若い人達に手伝ってもらいたいという気持ちがある。しかし、現在は接点がないため、そういつ

た気持ちを学生達にもわかってもらいたい。

(柴田委員)

役員プロジェクトに寸劇の構成がかなりの数あげられているが、1回の寸劇に含めて行われているのか。

(かながわ女性会議)

実際は36ページある。地域によっては長く時間を取れないところもあるため、地域に合う部分を取り上げて寸劇を行っている。見せるだけでなく、実際に演じてもらうのが良く、町内会長に若い女性の役を、若い女性に町内会長の役を演じてもらうことで、お互いのことが良くわかるようになる。

(柴田委員)

この寸劇は1つのテーマあたり何分くらいのものか。

(かながわ女性会議)

テーマが一つであれば数分のものだが、避難所の場面だけで15分程度、全てを行うと30分くらい。実際は寸劇だけでなく、ワークショップを行ったり、職員が被災地で見えてきた際の話などをあわせて行う。

(柴田委員)

寸劇はとても効果があると感じている。寸劇は長い時間ではなく、僅かな時間で行うことが出来るため、多くの人に広く意識付けすることが重要であると思うが、広がりには報告にあった部分くらいか。

(かながわ女性会議)

シナリオを配布したら寸劇を行ってもらえないかと考えたが、なかなか実現しなかった。私達が直接関わらなかつたが、横浜市栄区の町内会で寸劇を行ったケースもあり、神奈川区役所の方が人権研修の中で寸劇を行うなど、少しずつ広がってきている。

(柴田委員)

状況によって演劇の専門家を入れていくとのことだったが、その必要性は高いものなのか。

(かながわ女性会議)

演劇集団が寸劇を行うと、朗読劇ではなく演劇的に行ってもらえるので、効果が高いと思っている。来年度はこれまで寸劇を行ってこなかった小田原地区で行いたいと考えている。プロが行うことで広がる部分、自分達もやってみようかなというのを感じてもらえたらよいと思う。

(柴田委員)

継続希望調書の中でビデオ制作費の記載があり、金額が未記入となっているが、どういうことか。

(かながわ女性会議)

当初はビデオを制作し、広げること考えたが、昨年審査会で、寸劇を広げること重点を置いて頑張してほしいとのコメントを受けて、ビデオ制作を取りやめた。

(柴田委員)

台本を販売するとのことだが、既に販売しているのか。

(かながわ女性会議)

まだ販売していない。今回、デザイナーも入れて製作中である。無料で配っても効果は上がらないと思っている。買ったほうが、寸劇をやってみようという考えになると思う。

(柴田委員)

団体として、自立できるかを含めて、将来像をお聞かせ願いたい。

(かながわ女性会議)

現在、模索中である。防災寸劇だけではなく、女性相談など幅広く活動しており、一つひとつの柱に若い人を入れながらやっていきたいと思っている。実際に活動を通じて、少しずつ若い人が増えてきており、良い傾向だと思っている。

(大川委員)

防災寸劇やワークショップを行うにあたり、どの様な問題意識を持って行おうと思ったか、また、どの様な社会を実現しようと思って取り上げたかお聞かせ願いたい。

(かながわ女性会議)

女性だけに限らず、多様な人達が街で暮らしているため、どんな時も生き生きと暮らせるような街を目指していきたいと思う。特に災害時はジェンダー問題が極端に出るといわれており、日常から考えていけるような社会にしていきたいと思っている。

(大川委員)

寸劇ワークショップの受講者の考え方が変わったり、行動が変わるなど、どのような成果があったか。

(かながわ女性会議)

女性のための防災講座では、地域と関わりがなかった人が、何かと関わっていききたいと思うようになったり、若いお母さん方は子育てで忙しいため、町内会に関心がなかったが、意識が変わるなどした。

(大川委員)

ありがとうございました。

(委員による審議)

- ・ ボランティア活動補助金事業への申請事業に対するプレゼンテーション審査の結果を踏まえて審議を行い、対象事業を選考した。
- ・ 結果発表は2月15日(木)に行うものとする。

(その他(1) 平成30年度 ボランティア活動推進基金 21年間予定(案)について)

事務局から平成30年度 ボランティア活動推進基金 21年間予定(案)(資料5)について説明。

(その他(2) 平成30年度協働事業負担金における審査会意見及び現時点調整状況について)

事務局から平成30年度協働事業負担金における審査会意見及び現時点調整状況(資料6)について説明。

(閉会)

かながわ県民活動サポートセンター所長からあいさつ。

次回審査会日程（2月15日）